

サーキット・ライダー 2003年 2月号

聖徒の努め、交わり

聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。
あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪っては
なりません。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高
ぶらず、身分の低い人々「自分と違う人々」と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれ
てはなりません。

ローマの信徒への手紙 12:13-16.

昨年末にまだ生後1年に満たない赤ちゃんを連れた夫婦が、アフリカで自分達の子供と同年齢の何百万という子供達が飢えやエイズで死んでいる実情をインターネットのニュースで知り、同じ親の立場で悲しみを覚えると同時に「何かをしなければ」という思いに駆られ、パークリッジのアメリカ人の会衆と日本語ミニストリーのメンバーの前で「献金を募って送みましょう！」と訴えました。その呼びかけに応答して、私達の教会では1回きりではなく長期に渡り献金を募り、アフリカの教会を通して人々に献金を送ることにしました。とは言えどうしたら直接現地の人たちの手に私達の贈り物が届けられるかということとは大きな課題でした。大きな組織でアフリカやアジアの為に募金活動をしている所は沢山ありますが、そういった大きな組織に献金を送った場合、どこの誰に行くのかが曖昧になったり、組織の運営の為に献金の一部が遣われ、現地の方に行く額が少なくなります。

あれこれ考えている時に3つの可能性が示されました。一つはメソジストの基金を通す。メソジストは基金運営を教団がやっていますので、献金は100%現地に行きます。ただどこの誰に行くかフォローし難い。二つ目は教団の友人でリベリアから来た牧師がおり、彼を通してリベリアの教会に送る。3つ目。この出会いには不思議な神の導きを感じました。私が現在コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジの教育学博士課程に在籍しているのは以前報告させていただきましたが、昨秋取ったクラスで一人の日本人学生と知り合いました。彼は日本人留学生には珍しくクリスチャンで、私は初めて彼と会って話をした折に「へえ～」と驚きました。が、驚いたのはそればかりではありませんでした。彼は国際キリスト教大学を卒業後、ケニアに青年海外協力隊のメンバーとして3年赴任し現地の高校で数学を教えていたのです。日本に帰って高校の教師をし、その後思うところあってコロンビア大学で教育修士を取る決心をし、現在に至っていました。その彼から今のケニアの状況を聞き、胸を打つものがあると同時に、持てる国アメリカ、日本に住む人間の奢りを改めて認識しました。アメリカや日本など先進国の中には募金や慈善活動をする人は沢山います。しかし、私を含め多くの場合、募金を1回、或いはしてもせいぜい2～3回した段階で「何か良いことをした」気分になり、それで終わってしまいます。それで日々の生活に困っている人々のことはどこかに飛んでしまう。しかし実際に食べ物が無い人達、病気で苦しんでいる人達の生活は続きます、時に希望も見えずに。また心のこもっていない物質的援助はケニアや他のアフリカの人々に「貧しい」現実を教えるだけで、彼らに更に劣等感を与えます。そのような事実を正しく認識して彼らの痛み悲しみを自分のもの、自分の身内のものと思えば、自ずとすべき事も変わってくるでしょう。その友人からケニアで働いている日本人牧師とその家族を紹介されました。一般に私達はあまりにも無知でケニアで人々が何を食べているのか、どのような暮らしをしているのかさえ知らない中、日本人の牧師が現地でスラムの人々の生活向上の為、孤児院を作り孤児達の育成に携わり、幼稚園を作り、教会での伝道、大学での指導などを通して救済活動をしていることを知り感動しました。

私は「この方達の働きの為に祈ろう。献金を遣って貰おう！」と思いました。勿論、教会員の承認を得てからですが、、、。神は不思議な導きで私達を隣人に出会わせて下さいます。驚くべき恵みにより私達の今日はあります。クリスチャンとは、教会とは聖徒の交わりです。閉じ籠っていては出会いはありません。より広い世界に目を向け隣人はどのように生きているのか、自分が一体何ができるのかを問い掛けていくのが聖徒の努め、交わりです。昨年末から年始に掛けて、荒美俊三兄、岡本三千彦兄の洗礼の喜びを分かち合い、「目の不自由な人達の為に真のバリアフリーを実現したい」と学んでいる韓国人留学生（ご自身も全盲）と出会ったり、上述の出会いがあったりと、生きて働かれている神の導きを感じています。また聖徒の交わりにも確かな手応えを感じる今日この頃です。不安の多い世情の中、神の大いなる御心、愛を感じるのは私だけではないでしょう。

吉松 純